

私は精神障害者専門の相談員の仕事をして9年。毎日精神科病院で働いている。性格は根暗で友人は妹を入れても蛙の片手で数えておつりがくるほどしかない。休みの日は24時間中22時間床についているか、読書をしている。特技は尻を拭いてもいい草とダメな草を瞬時に見分けること。趣味は旅行。旅行に行くことができないときは大好きなアジアの市場の臭いの代換品として愛用中のごみステーションの芳しい薫りをかぐこともある。要するに旅中毒なのである。合コンでこの自己紹介では全くモテないだろう。しかしこの自己紹介はまだまだ日本社会に擬態した私が見せる外向きな自己紹介だ。

インド人は左手でお尻を拭くというが、私を一週間インドに行かせてさえくれば左手を使わずとも尻を汚さずに大便をできるように肛門を調整できる。本当の特技はこれだ。通常これを言うと脅迫的清潔主義大国日本では浮いてしまうので、あまり口にするのではない。冒頭から尻の話ばかりするが、私はこの大便の件はとても大切なことだと考えている。精神科で相談員をしているとリストカットをしたりして、流れ出る血を見ることで「自分は生きています」という事を確認し安心している、という患者によく出会う。この脅迫的清潔主義大国日本はあまりにも清潔で文化的で画一的な社会を築いたことで自分が生きているという感覚を感じにくくなってしまっているのだ。そこでなぜインドの大便の話になるのかというと、大便は最も身近に自分が生きていくということを実感できる事象だと思うからだ。私はインドに行った時にこのことを思い知った。郷に入ったら郷に従えがモットーなので、旅行

に行くということはその土地で生活してみることであると理解している私はインドに行けばもちろんインド式の用のたし方を実行する。インドではトイレの中にカメと手桶が置いてあり、大便をした後は手桶を使って水をすくい、左手を濡らし肛門を拭き、大便がつかなくなるまでこの動作を繰り返し、最後はびしょびしょのままパンツをあげる。たったこの一連の動作だが、私もこのやり方を実践していけばいくほど気づきがあった。まず初日は日本に感化されているので少々抵抗があるが、自分の肛門に意識を集中して直接触るということ自体新鮮であった。常にもある自分の体なのに今まであまり意識して接してこなかった自分の肛門の隆起を初めて認識した。そしてその次の段階としては段々と肛門を汚さずに大便をすることができるようになってくる。それは体調や便の具合もあるが、日本で何にも後のことを考えず大便をしていたころよりはるかに肛門の感覚が研ぎ澄まされ、一定の間隔で機械から出てくるソーセージのようにきれいに大便を区切ることも出来るようになる。その技を極めることにより左手を汚すことは少なくなり、次第に全く汚れない自信を持つて用をたすこともできるようになる。調子に乗って汚れてないから大丈夫と洗わずに下着を上げると失敗の時もあるのだが。このような調子でただ大便をするという事象だけだが、用をたす前に今の自分の体調はどのようなものかを慮ることができ、出た大便の形状やにおいより自分の現在の体調を認識でき、全く左手につかず用をたすことが出来た時などは自分の肛門の筋肉にまで統率をとりコントロールできた自分を誇らしく思ったり、なにより食べたものが体の中の管を全て滞りなく抜け、出てきたということ、自分は故障せずに正常に機能していて「生きている」ことを実感できる作業のように感じる。インドに居ながらなんと小さなことを考え

ているのだと自分を嘆いたふりをしながら、旅の中ではこのような時間がとても楽しい瞬間だったりする。日本に居れば何でもない大便という事柄がインドでは自分の存在を確認でき、生きている事を自分で実感できる何よりの機会となっていると思う。インド人がどう思っているかは分からないが。私は日本に戻り最新のトイレに行くと、この国の将来が不安になる。入っただけでトイレの蓋が自動で開き、何も考えず大便を放出すれば勝手に手ごろな温度の水が手ごろな場所をねらい飛び出してきて、お尻をきれいに洗ってくれる。そして最新のトイレには拳句の果てに、においがしないように消臭してしまう機能まで付いているらしい。このように、自分が生きている事を実感する瞬間をこの脅迫的清潔大国では感じる機会が少ない。もちろん私も日本に戻れば研ぎ澄まされていたはずの肛門の感覚も怠惰になってしまったため左手で尻を拭くこともできなくなり、日本に従応してしまい自分の力の衰えと環境に慣らされてしまう怖さを実感する。よって私は最新式のトイレをみると何だか自分が何にも考えられず、周りに流され、自分が生きている実感が持てない人間になってしまいそうで恐ろしくなりどうしても和式のトイレに入ってしまう。日本は豊かになりトイレが最新式になり生きている実感を持つ機会を自ら放棄し、勝手にお尻をきれいにしていただけのようになり、紙が必要になり石油の取りあいがおこり、戦争が始まり人が人を殺す。トイレの蓋を自動で開けるため電力が必要となり原発をつくり放射能におびえる。自らが悩みを作りだし、その課題に自ら振り回され苦しむ。その姿は精神障害といわれる人がよく陥っている構図に似ているものを感じる。例えば脅迫神経症などの人の中には健康でいるために医学書を読み、その医学書に茶色いシミがついていたから、それは多分血液で、その血液に触ってしまったか

ら自分は病気に感染したのではないかと思い、家のものを全く触れなくなり、全てティッシュでつかんだり、家族に感染させてははいけないからと家のトイレが使えず、部屋でバケツで用をたすこととなり、全く外出できない、というような症状の人を見ると、同じような構図を感じてしまう。戦後奇跡的な経済成長を果たし、先進国の仲間入りをしたにも関わらず日本はある意味病気なのだと思う。

日本から飛び出し大きな世界にでて、なぜか自分の肛門の筋肉という対極にありそうな小さな事ばかり考えている。こういう瞬間に、私は病みつきになってしまっている。世界から見たらかなり独特な思考の日本で確立された自分の価値観を全て信じきれない私は、新しい価値観を求め、また、感じられなくなってしまう「生きていく」を感じ自らの目で見て考え、自分の価値観を崩壊させ、新設する面白さから旅に出るのだ。

私は、中流家庭の一般的な家に産まれた。父親がサラリーマンで、母親が専業主婦。長女の私と妹、弟。新興住宅地に一軒家を購入し角地で地下車庫が父親の自慢だった。お金にも苦労するわけでもなく、母親は料理が上手で一般的な家庭だった。父親は両親を亡くし淋しい思春期を送ったせいかわつちが性格が歪んでいた。お金しか信じられず、自分の部下や家族を下に見ているような物言いをする人だった。私はそんな父が嫌いだった。相手の意見を聞こうともせず一方的な父親にアルコールが入った時などは特に家族でいざこざが起きるのでめんどくさかった。ある晩、父親の機嫌が悪い上にいつものようにアルコールが入り、そんな父に好戦的な妹が突っかった時に、父親が妹を段ボール箱に入れ、持ち手の穴から殺虫剤を噴射した時、私は妹を守るため父親を殺そうとカラビナ（作業現場などで命綱等を接続する為の金

属)で思いきりソファーからジャンプし父親の脳天目指して殴りかかったことがあった。思いのほか頭は固く割れなかった。あの時割れていれば今よくニユースで耳にする女子小学生が父親を殺害とキャッチーな見出しが躍るワイドショーの主人公になっていたのかもしれないが、そうならなくてよかったと思う。しかし、虐待があったとかそのような高尚なものではなく父親が少し人とかかわり方に不得手な人だったのだと今になっては思う。なので小学校四年生のときの私の好きな男性のタイプは「意見が違っていても落ち着いてお互いの意見を話し合える人」だった。周りの女子がアイドルの名前や顔の特徴や足の速い人等と言っている時分に目を疑う内容だ。母親や担任の先生を心配させたかもしれない。どの家庭にもあるような日常の光景だが初心な私はそんな父親をあまり好きになれずにいた。そんな時いつも本を読んでいた。ずっと好きだった恐竜・妖怪・アンコールワット・ピラミット。本の中の異国の世界は私の楽しい想像を膨らませていった。

## カンボジア

ずっと行って見たかった。なんともいえない石でできた顔の遺跡。好きな顔のタイプは？と聞かれるといつも「アンコールトムの遺跡の顔」と答える。あの全てを見透かしていそうであなどれない切れ長の目。そのうえで温かく包みこんでくれそうな微笑。発達した顎に感じるなんともいえない安定感。写真集で何時間見ても飽きないもろタイプの顔だった。大学生になり同年代の友人が芸能人やイケメンな男子に夢中になっている頃、私はアンコー

ルトム の遺跡群の写真集を見てはいつか会いたい！と思っていた。そして、とんかつ屋や居酒屋でバイトをし、お金をため何の迷いもなくカンボジア行きの航空券を買った。一番に行くのはこの国と決めていたのだ。

空港に着くやいなや「米の臭い」が私を包んだ。空港の空気の中をこんなに高い確率で米臭が占めるなんてカンボジアの人はどんな生活をしているのだろう。ワクワクして仕方がない。ビザを取っていなかったので、空港で手続きすることとなる。なぜか窓口の男の人が手を握ったまま離してくれない。カンボジアの挨拶かとも思ったがそんなことは地球の歩き方には書いていない。空港係員のセクハラか？ 思っているとやはりそうだった。しかしそのおかげでビザの申請代金を請求されなかった。ラッキー。

いまいちな家庭だったため、あまり父の事が好きではなかった。しかしビザの申請代を工口いおじさんがスルーしてくれた時ばかりは父と母がこの顔に産んでくれたことに感謝した。顔も、この元気な体も私の大切な社会資源なのだ。低いが犬並みに良く効く鼻や、外国では貴重らしいまつすぐな髪の毛、英語は全く話せないが何とか生きていく為に5人くらいであれば同時に話している内容を聞き取ることでできるすぐれた耳。こけしのようなのっぺりした顔、思春期にはすぐく嫌だったでかい図体さえも世界から見ればなんて事はないサイズ感だ。出国のために列に並んでいる欧米人のサイズに自分の大きさなど全く気にならなくなった。かわいい靴が履けなくて嫌だった大きな足も、こんな素敵な地球にそこの女子より面積を取って踏みしめちゃっているなんて得した気分、というような思考に変化した。自分が今まで悩んでいたことなどどうでも良くなるような気がした。まだカンボジアの土を踏む前から胸は高鳴るばかりだった。

ついに空港をでた。暑さが違う。米の臭いのする空気を肺に入るだけ吸い込んだ。まだ何も始まっていないが楽しいことが始まる予感がして仕方がない。そんなことを考えているのんきな私をカンボジアの洗礼が迎えてくれた。服のボタンは取られ、胸ポケットに入れていたボールペンは一瞬で子ども達の輪の中に消えていった。機内で貰ったウエットティッシュでさえもう私のリュックのポケットから離れ子ども達の遊び道具となっている。しかしまだ私の頭はお花畑で「これがカンボジアかぁ」と胸の高揚と期待、不安で呑気なままだった。子どもたちを脱出すると今度はトウクトウクの運転手に囲まれて、自分の愛車に案内しようともみくちやにされ、運賃の値段交渉なんてできる状態ではない。しかし、「やっとカンボジアに来た」という興奮で呑気な私は、誰より大声を張り上げ「オーケーオーケー、シー（静かにしてのポーズ）」とぼ謎の身振り手振りでおじさん達を黙らせ、自分の周りに待たせ「ハウマツチ」と一人ずつ聞いていった。まるで市場のセリのように。そして一番安い値段を言ったおじさんのトウクトウクに乗り込み、お勧めのゲストハウスに連れて行ってもらった。ゲストハウスに着くと、日本人が多く泊まるゲストハウスだったらしく胸に大きくあさげ（味噌汁の）と書いたＴシャツを着たワンさんという男性が、迎えてくれた。この日から彼の名前はあさげだ。ワンさんが片言の英語で宿のシステムを説明してくれるが全くよくわからないのでなんとなく「イエス」といった。宿には多くの旅行者がいて、何年もこの宿にいるドンのような人もたくさんいた。国民健康保険料も払っているのかどうか、日がな一日日本の古い漫画を読み、新米の旅人にこなれた感じで旅の指南をする。私はどうしてもこの人たちをあまり好きになれなかった。理由はいろいろな旅に行くにつれ自分なりの理由が見えてくること

となった。そんなドンの誘いやお説教をかいくぐり街を探索してみることにした。まずは市場に行きたいと思い早速歩きだした。その土地の文化や生活が見える市場を楽しみにしていたが到着してみると臭い。大体の臭いものは好きな方だが、なんともいえない臭さ。臭いの粒子が鼻の粘膜につき、どのような経路を通って人は臭いを感じるのかは細かくわからないが、このルートがこの一瞬の臭気でオーバーヒートして壊れてしまうのではないかと疑いたくなるほどである。魚から牛か豚の臓物が常温できれいに並べられ、鳥は内臓がすっぽりと抜かれ大砲で打ち抜かれたかのような大穴があいたまま、こちらに大穴を見せてくれている。その上を全くやる気のない速度で回る扇風機のようなものにビニールの袋が心もとなく結ばれている装置が、ゆる〜く八工の休憩を禁止している。なんとという管理方法。日本の賞味期限だの、瞬間冷凍保存だの、電車のつり革用の除菌用スプレーだの、赤ちゃんの哺乳瓶の殺菌だの概念が全く無意味に思えてきた。そこから下半身裸の子どもたちが少し歩くだけで靴が魚のうろこできらきら仕様になるような市場の地面に座って遊んでいる。

日本はというと、研究者が顕微鏡を覗かないと見えないような「ばい菌」という概念を幼少期から知らず知らずのうちに植え付けられ、勝手に怯え、わざわざ実際には見たこともないような敵に向かって除菌スプレーを振りかけ、心配しているのではないかとという取り越し苦労感をまた考えてしまう。

街をぶらぶらしながら旅程最終日までは持ちそうにはないので両替商の所で両替することとした。私が何も考えずに日本円の一万円札を出すと、中国系の顔をした両替商は透明なお金がたくさん入った箱に頬杖をついていた腕を大儀そうに動かし、札を渡してきた。到着して間もない私はまだお金の換



算レートがピンと来ていなかったが、そんな私が数えてもどうしても足りない。千円分もないのではないか？電卓をたたき示されたレートで計算し、正規の金額を両替商に見せるも犬や猫を追い払うときのようには手をシッシツとするだけである。これはおかしい。炎天下の日差しと飛行機疲れで負けそうにもなるが、負けてはられないので大きな声で「リターンマネー」と叫ぶが両替商は目をつぶりシッシツとするばかり。数百円ならいいがこんなに高額を初日から取られては困るので戦うことを決めた。バイトでとんかつを何枚揚げた分のお金だろう。リュックを下し長期戦の覚悟を見せつけ再度計算器を見せつける。しかし全く動じないおじさん。「ポリス！ライヤー！」語彙力のない英語で大声で攻撃してみるが全くちが明かない。私の心もとない語彙力ではすぐに単語が思いつかなくなったので、日本語で本人を目の前に抗議（ほぼ悪口）することにした。「そんなきたねえ事してるから目が黄ばんだんじゃ（岡山弁）」「ここでお前みたいなウソツキが商売できんようにしてやるからな（浪花の金融会社のように）」「本気で怒っている形相でありとあらゆる文句を言ってみた。今まで生まれてこのかた相手を目の前にこんなに文句を言ったことがなかった。そうすると人の文句もそんなに無限に出てくるものではないことを初めて知った。そして日頃からあまり感情をむき出しにして、人に腹を立てることがなかった自分に気付いた。こうなってくると相手に怒っているという感じを伝えるために全く意味のわからないことをいかにも怒り狂っている様子でどなり散らすことにした。「お前の母ちゃんまでべそ」「隣の客はよく柿食う客だ」「あなたは私のなんなのさ」と炎天下の中、両替商のお札の入った箱をたたきながら思いつく限りの文章を叫んでいると、何だか可笑しくてたまらなくなってきた。異国の地でたった一人、超怒った顔を

しながら「じゅげむじゅげむ……」って。笑ってはいけない環境がさらに私を複雑な表情にしていたと思う。私を見ていた日本人観光客の冷たい視線が今でも忘れられない。この攻防を継続すること1時間、おじさんは根負けしたのか、私の渡した一万円を放り投げてきた。そして相変わらずシツシツとジエスチャーをした。勝った。しかし、勝ったと同時に反省もした。

日本での生活で思いつきり自分の感情を人にぶついたり、涙が出そうになるほど笑いがこみあげてくる楽しい気持ちを感じていただろうか。人に気を使い、怒ることもどこかにしまい、周りに順応するために楽しくもないのに笑顔を作り、過ごしていたような気がした。しかしここでは違う。たかが両替一つでも全て自分の責任で行動し、対応し逃げ場がないから常に本気で相手に向かう。日本に居たときはただ他人を信用しない自分だったが、ここでは少し違う。他人を信用しないというのは自分を信用する（人のせい）にできないので全て自分で責任を取る（？）ということなのだ。日本に居た頃の私はただ他人を信用していなかっただけで自分を信用できていなかった。他人を信用しないということは自分を信用することなのだ。おじさんとの対決で教えてもらえたような気がした。また、自分の価値観で万札を出し、箱に入っているお金がなくならん勢いの金額の両替を強要させ、ここはカンボジアの田舎なのに日本の貨幣経済を勝手に持ち込み、なんと傲慢な人間なのだと気付かされた。どうして相手に合わせて少量ずつ両替できるような千円札を用意できなかったのか。自分の配慮のなさに少し嫌気がさした。この一件からいつアジアに旅立っても困らないように日本で買物するときにも常に千円が生まれるように買物をしている。財布の中が千円だらけの人は少し貧乏な人が、アジアでの両替に備えている人かのどちらかだと思う。

おじさんとの一時間の攻防と反省でのが渴いたので宿の近くの安食堂に入った。のが渴いていたので「コーク」と注文した。何度も聞き返されるので、「オツケー」と連呼した。一時間経っても全く出てこない。2時間待っても出てこないの、さすがに店員に質問すると「ノープロブレム」と。何がノープロブレムなのか全く分からないが待っていると運ばれてきたのはポーク。豚の丸焼きだった。女一人でこんな豚の丸焼き食べきれないわけがないだろう、と突っ込みたくなるがもはや時はすでに遅し。穴という穴から湯気を出し、店員は「お尻からハーブを詰め込んだ自信作だ」と言ってきた。食べかたさえ分からない。もうこうなったらみんなでパーティーをするしかない。陰気な私が大声で「エブリワン、レッツパーティー」こんなどこかのテンションの上り切ったDJしか言わないような発言をする自分が新鮮だった。多分人生の中で初めて最後のことだと思う。この単語しか丸焼きの豚をシェアする方法が思いつかなかった。そんなこんなで宿のワンさんもみんな呼んで豚の丸焼きパーティーを主催することとなった。大いに盛り上がったが、この一件以来コーラを注文時には現物を指さして注文するという癖が抜けるまで相当の時間を要した。カンボジア入国一日目に何度も大声を張り上げ怒り、笑い、考え、反省してばかり騒ぎし、なんと濃い時間を過ごしたのかと振り返ると興奮が止まらなかった。

数日後、代表的な観光地であるキリングフィールドに行った。キリングフィールドには当時ポルポト派に虐殺された人の頭がい骨の塔があり、地面には殺され、土に埋められた人の衣類が地面のあちこちから顔を出している。そんな観光地で一人のポロキレをまとった子どもが近づいてきて「5ドルプリーズ」と観光客に話しかけている。よく観察していると欧米の観光客から

お金をもらっては身なりのきれいな女性（多分母親）の所に持っていき、すぐ次の観光客をターゲットにしている。欧米人は3ドル、5ドルとお金を渡している。私はというとこの光景を見ながら考え込んでしまっている。私はカンボジアが大好きだ。カンボジアの公務員の収入を考えたら毎日何十ドルも貰う子の子どもの方が全くの高収入だった。私は子どもに3ドルをせがまれないながら、カンボジアの国が大好きだからこそお金をあげることにはしなかった。公務員より乞食を演じて外人からお金をもらう方が安楽だと思う子どもだらけになってカンボジアが衰退するのが嫌だった。こんな私の3ドルで何が変わるわけではないけれど、3ドルを渡すかどうかということですら自分で考え判断し、実行するというこの過程がたまらなく好きなのだ。

カンボジア最後の夜、初めての海外旅行で不安でいっぱいだった私をいつも気にかけてくれたワンさんにどうしてもお礼がしなくなつた。考えた私は色紙を渡そうと考えた。ワンさんの似顔絵を色画用紙でつくり感謝の言葉を綴ってみようと計画した。しかしいざ色紙とのりとはさみと色画用紙を買いに出かけたはいいが、色紙という意味の英語もわからない。そもそも色紙とは日本文化特有の物で異国には無いのではないか？とも思い始めた。片言の寄せ集めの単語で色紙らしきものを尋ねるが全く見つからない。もう既製品を買うことはあきらめ、工夫を凝らし代用品で賄うことに決めた。のりは適当に入つた安食堂の米をこっそりポケットティッシュが入っていたセロファンに包み持ち出した。色画用紙はコンビニで一番カラフルな新聞を買い、その色の部分をうまく切り取って使うことにした。はさみはもう自分の爪と指を駆使し代用することにした。きれいに切れない部分は自分の唾液を塗って切ることにした。今思うとなんとも汚い色紙だろうとも思うが。しかし肝心

な色紙がない。土台のかたい紙が無ければ始まらない。シムリアップの夜を物欲しげにきよろきよろしながら歩いているとカッターシャツ屋さんがあった。カンボジアの男性は長袖のシャツを着ている事が多かった。強烈な日差しから肌を守り、それでいて涼しいというかなり利にかなった代物だ。なんとそのカッターシャツ屋さんの目の前のごみ箱に私の求めていた色紙が捨てられているではないか。色紙と呼んではいるが実際はシャツの型が崩れないようにシャツに挟んである型紙だ。あった。私は無心でシャツ屋の前のごみ箱をあさり始めた。いい色紙を探して。大きさを比べいい感じの数枚のシャツの形をした型紙を持って更に物色していると、何者かが私の左腕をつかんでごみあしりをやめさせた。私が顔を上げるとそこには見るからに警官つばい人が2人も立っていた。あまりに夢中になり良い型紙を貪欲にあさっていたのだろう。しかも洗濯物の計算ができず、おまけに宿の洗濯システムが理解できていないことが重なり、上下カンボジアで調達したへんちくりんな服装だったため、身なりもかなり不審だったのも良くなかった。必死に「日本には義理人情という文化があつて、色紙をね…」と説明しようとするが伝わるわけもない。「はさみ」さえ伝わらないのだから。持ち物を検査されるとさらに困ったことになった。ポケットにティッシュのフィルム包まれた白米が出てきた。これは何だと質問される。もちろん私の語彙力では「白米を練つてのりにして日本固有の？文化である色紙をプレゼントしようとしたためごみをあさっていました、怪しくありません」などは説明できるはずもなく、初回の海外旅行の最終日に警察署に行くことになった。もうここまでかとも思ったが、ワンさんとの別れも、飛行機の出発も翌日に迫っているので、背に腹はかえられないと思い、伝わらない英語は中止し、もう実際の色紙作

りをおみまいすることにした。またなぜこんな異国の地の警察署で色紙作りを屈強な警察のおじさんたちとしているのかと思うと笑いがこみあげてきたが、警察署で新聞をちぎり白米をこね日本人特有の細かい作業を披露しているうちに警察官の目の色が変わり、色紙作りを手伝ってくれる人まで現れた。2時間ほどでワンさんの色紙を完成させた頃には、警官みんなが喜んでくれた。すると一人の警官が大きな封筒を持ってきてこれにプレゼントを入れると言うので、ちょうどラッピングする手間が省けたと思い、その封筒に入れてもらった。するとその警官が、封筒の口を既成ののりで閉じ始めたときには未だかつて無い位笑った事は言うまでもない。その後警官とバイクに二人乗りをし、ゲストハウスのワンさんの所まで送ってもらい、警察もプレゼントの瞬間が見たいということでワンさんにプレゼントした。ワンさんはとても喜んでくれ、ワンさんと警官と一緒にご飯を食べた。

すると近くに居た子どもが私のデジタルカメラに入っている写真を見始めた。その写真は私が大学の仲間と酔っ払い街灯の明かりがともっている道路で寝ころんでいる写真だった。それを見ていた子どもが私に質問する「あなたは家がないのか？」というので「違う。これは街灯で私の家じゃない」というと「家でもない所になぜ電気があるの？」と聞かれた。本当だ。私が酔っぱらって深夜にふらふらしていても命が取られないのは、街灯が道を照らしてくれて明るく治安が維持されているからだ。さらに突き詰めて考えると市や国が街灯を設置するだけの財力を持ち、インフラを整えるための技術があり、さらに言うところの街灯をつける元になる予算を市民税なり法人税を支払うことができる仕組みがあるから、こんなに有難い事柄の上に私の安全な日本での生活は保障されているのだと気づいた。家の電力もままならないカンボ

ジアの古い家の子どもには街灯の概念が無かったのかもしれない。自分の恵まれた環境に感謝した。それから私は日本に戻ってから毎週街灯を見るたびにありがたやとおばあさんのようについ拝んでしまう。このように街灯を見るたびコーラを見るたび、豚を見るたび、職場の同僚に色紙を書くたび、「みんなどうしているかな」と遠く離れた熱い国の人々を思い出す。今までどこか自分とは関係ない場所の関係ない人たちの話だったニュースが気になるって仕方がない。当初は遺跡が見たくて訪問したカンボジアだったが、思い出すのはいつもカンボジアで出会った人々のことばかりだった。しかしこんな風に思いだせる相手がいること自体が嬉しく幸せだと心から思う。こんな見知らぬ私に本気で関わってくれた人たちのことを考えることができ、旅から帰った後もこの気持ちは永遠に続いていく感じが私を旅に夢中にさせた。私はこの時からずっとかなり予後不良な旅中毒に罹患してしまった。

## インド

バックパッカーの聖地といわれ、人生観が変わると多くの書物に書かれていたインド。いぶかしく思いながらも行って見たかった。小学生の時、修学旅行に行く為に寺の勉強をした際にはなぜか一人だけタージマハルを発表し、高校生の時にはあだ名がガンジーであった自分としてはどうしても魅かれる国であった。特にインド人にとっての聖地であるバラナシにはどうしても行ってみたいと思っていた。デリーに着くや否や寝台列車を予約し、バラナシに向かった。寝台列車はベッドが3段で折りたたみ式なため、「私は眠りたい」

という強い意思表示をしないとインド人が際限なく話しかけてくる。本心から笑っているのか笑っていないのか全く読み取れない表情で。会話は楽しいのだが旅の疲れでついつい居眠りをする私に、「疲れているならこれを食べなさい」と手製の謎の食べ物と手製の謎の食べ物とを渡してくれる。食べ物を食べても眠いものは眠い。2時間ほど拘束された後、やっとの思いで寝ることを許されても、横のインド人青年のコンバースの靴の中から漂うにおいによって全くもって落ち着かない。あのコンバースの靴底で爆弾を作り、核爆弾の替わりに使ったら戦意も喪失し、世界は平和になるのではないかというような馬鹿なことを考えていなければ自ら鼻をちぎってしまいそうになる臭さだ。しかし、コンバースの彼は良いやつで、勝手に私の切符を確認し、目的地に着くと声を掛けてくれた。その頃には戦意も失せるそのにおいにもなぜか愛着がわいていた。人間の体の中で一番順応機能が高いと言われる鼻はこの少年と一緒に居るためなのではないかと思う。そうこうしているうちに、私が待ちに待ったバラナシに到着した。到着するやいなやなぜか各国共通のおじさん臭を醸しながらリキシャーのおじさんにもみくちゃにされる。私はおじさんがリキシャーで行けるといふ距離であれば大体リキシャーに乗って目的地に行く。おじさん越しの街のにおいや砂埃、人々のどなり声や雑踏の子ども達の声全てを余すことなく感じたいからだ。本来なら日焼けを気にする年頃なのだが、もはや大好きなアジアで浴びた日光でできたシミなら愛おしいとさえ感じる始末だ。そんな変態っぷりを発揮していると、目的地に到着した。ぶらぶら歩きまずゲストハウスを探した。適当に入ったゲストハウスで、「一番デラックスな部屋」を見せてもらう。最上階だと言われ、ついていくとそのデラックスな部屋は存在した。床が冷たいからとぴったり床にひっついてる少年



をそつとまたぎ、部屋を見てみると、入口に今まで見たことのない程の手垢が付いていた。こんなにも手垢がつくまでには一体何百回、いや何百万回インド人の手が触れたのだらうと思うと、さすがデラックスだと思い、この部屋にすることにした。どうも旅人の積み重なった汗からのアンモニア臭が抜けきらない空気と、おなじみの人型にくぼみができたベットに寝ころび、その人型に自分の体を合わせ、カビだらけの天井に舞うファンを眺め、今にもファンが落ちてきてアナコンダの映画で白人がアナコンダの口に船のモーターを投げ込み対決するシーンを思いだし、ついに旅が始まるのだとまた一人ニヤついてしまう。そんなことばかりしてられないので、早速外に出てみる。入り組んだ路地を悠悠自適な牛が闊歩し、街中では人々が怒っているのか喜んでいるのか解らない表情で何か叫んでいる。生の当たり屋も初めてみた。バイクにぶつかり額から血を流し、言いがかりをつけお金をもらうと急に痛がるのをやめ、次のバイクを探している。なんとも力強い生き様。時間もあるのでゆっくり歩いているとある路地で声を掛けられ、子ども達に手を引かれ建物に連れて行かれた。何やら楽しい音楽が溢れ、美味しそうなにおいもする。どうやら結婚式らしい。いきなり見知らぬおじさんに手づかみのカレーを口に流し込まれる。なんともシャバシャバなカレーは半分も口には入らない。潔癖日本人ならヒステリーを起こすだろうか。しかし何やら楽しそうな雰囲気である。ひとしきりよくわからないおじいちゃんやおばあちゃん顔と顔を合わせられた後、子ども達とダンスを強要された。どうしてこんなインドの片隅でへたくそな踊りを人の晴れ舞台で披露しているかと思うと笑えてくる。そうこうしているうちに宴は終焉を迎え、おじさんのシャツの袖になぜか自宅の住所を記入しお別れする。

翌日の早朝、とうとう一番行ってみたかったガート（沐浴場）と呼ばれる場所を訪れた。どうしても聖なる河ガンガーで（ガンジス河）沐浴してみたかった。最近ではインド人でも水質汚染を気にしてこの場所で沐浴する人が減っているらしい。しかし私はもちろん古くからのならわし通りこのガートで沐浴することにした。意外と冷たい水に足を入れ、意を決して水につかる。底にはヘドロのようなものが堆積していて、たまに足が何かに当たるが、恐くて引き揚げる勇氣は出なかった。そうこうしているとインド人が正しい沐浴のやり方を教えてくれた。正しい沐浴法の最後には聖なるガンガーの水で口を清めるそうなので、言われた通りやってみた。なんとなくすがすがしい気分になっていると、インド人が皆で流れてくる大きな物体を沖の方に寄せている。何かと思ってみみると牛の亡骸だった。水につかっているためか膨張して小さな島のように見える。そうこうしていると今度は体育座りをした格好の人間らしいものが流れてくる。インド人が僧侶は焼かずにガンガーに流すのだと教えてくれた。僧侶は生前にたくさん徳を積んでいるから最後に焼かなくても輪廻転生で次は良い世界に産まれることができるからだそうだ。あまりに衝撃的な光景と宗教観に触れ、圧倒されていた。牛をよけながら洗濯をする人、カップルで河のほとりに座りながら何やら愛を話らっている人、容器にガンガーの水をたくさん詰めて持って帰ろうとしている人、シャンプーしている人、水に潜って遊んでいる子ども、目の前でふんどしを外し裸になり手慣れた手つきで沐浴する人、プジャー（毎日行われる祈り）に参加する人、ガンガーの水を飲む牛、この大きな河がインド人の生の営み全てを包括してゆったりどこか遠くの世界につながっているような気がした。あまりのカルチャーショックに何時間も聖なる川に浸かりばんやりその営み

を見ていた。あまりに長いこと浸かっている日本人が珍しいのか、気付くと大きなテレビカメラのようなものを持ったおじさんに撮影されているのに気付き、やっと正気に戻ることが出来た。もしかしたら「風変わりな日本人が何時間もガンガーに浸かる」というような題名で放送されていたのかもしれない。

翌日は早朝からガートを散歩し、火葬場に行った。この場所はインドの中では、ガンガーのほとりで亡骸を焼く事のできる聖地とされている。近くに「死を待つ者の家」という建物があり、この火葬場で焼いてもらうために、インド中から死期が近い人が集結し、この建物で死を待つのだそうだ。お金がなく亡骸を焼くことができない家族がそのあたりに亡骸を置き祈っている。火葬場はガンガーへと続くなだらかな坂になっていて、いたるところで細く黒い煙が行く筋も立ち上っている。不思議と臭いはない。そのガンガーへ続くなだらかな斜面ではカーストの位が高い程坂の上の方で、低い程ガンガーの際で火葬をするとインド人が教えてくれた。カースト制は無くなったはずだったが、全くその慣習は消えていなく、火葬場で亡骸を焼く人は代々と亡骸を焼く係、洗濯をする人は代々洗濯をする係として成り立っている。洗濯の係の人はカーストにも入っていない不可触民とされているらしい。24時間ひっきりなしに、黄色や白のきれいな布がかけられ、オレンジ色の花の輪っかが載せられた亡骸が竹でできた担架に乗せられ、運ばれてくる。それをキャンプファイヤーでもするかのように井の字に組まれたまきの上に載せ、その周りを家族が何周か歩き回りながら、口々に何かブツブツと唱えている。そうこうしているうちになんとも慣れたスムーズな手順で火がつけられ、たまに赤や黄色の粉をかけながら段々と亡骸が焼けていく様子を家族はじつと

見ている。不思議と泣いている人はいなかった。布は焼け落ち手や足などがだらんと出てきたり、足や胴体がよじれるような体勢になるがその度に死体を焼く係の男の子が棒を使ってうまく均等に焼けるように調整していく。そのなめらかな所作に感心しながらぼーっと見ていると、私の横に年齢が不祥なインド人が座りこみ話しかけてきた。あまり若そうな様子ではない。「ずっと、見ているけど、日本人？」火葬場では話しかけてきて勝手にガイドをしてお金を請求するインド人による被害が多発しているというからあまり相手にしていなかった。すると再び話しかけてきて「日本人は可哀想で大変だね」と言ってくる。私はなぜかが全く分からなかった。自分の価値観でいえば金銭的には豊かで、カースト制度もなく、自分が努力さえすれば宇宙飛行士にでも内閣総理大臣にだってなることができる。それなのにカーストで職業や結婚相手まで決められ、どんなに努力しても自分では超えることのできない大きな壁があるのではと考えていたインド人が日本人の私に向かって「可哀想」と思っていたとは。なぜかと彼に聞くと「インド人は全てを自分で決めなくても神が決めてくれる。仕事も結婚相手も。日本人はすべて自分で決めてなきゃならない。しかも失敗しても全て自分のせい。大変だ。しかも仕事仕事仕事。インド人は家族家族友人友人ちょっと仕事」というのだ。私の価値観は崩落した。勝手に私はインド人はカーストを憎んでいて自分の自由にできない人生を呪っていると考えているのだと決めつけていた。全くの勘違いだった。私は驚きすぎて夢中で彼に質問した。「カーストは嫌じゃないの？」と聞くと、彼は「生まれたときからそうだから嫌とか嫌じゃないとかはない。でも仕事がなくなったり、困った時は同じカーストの人が助けてくれる。日本にもあるのか？」といわれた。私は「日本には無い」と答えた。そして、

「なんでインドの人は葬式の時に泣いてないの？」と夢中で質問を続けた。すると彼は「泣かない。なぜならバラナシの火葬場で焼いてあげられるってことは最高に徳を積むことだから、この場所で火葬できて嬉しいことなんだ。最愛の人を最高の場所で送ってあげるとは自分自身が徳を積むことでもあるんだ。だからみんながハッピーなんだ」と。ガテンがいった。そうだったのだ。日本人が葬式でおいおい泣くのは「もっとこうしておけばよかった。もっと話をしておけばよかった。仕事が忙しくて会えなかったけど会いに行っておけばよかった」という後悔の念が強く出るからなのだ。インド人は違う。自分ができるときにできるだけの徳を積んでおけば最後は神が助けてくれ、次はさらに良い世界に生まれることができるという安心感の中で大事なものは家族・友人でその他のものはこれに追隨を許さないという生きる上での尺度がはっきりしているのだ。なので家族の体調が悪いというと仕事はそっちのけで家族の元へ飛んでいくし、周りもそんな人を止めることはしない。日本はどうだろうか。母親が体調を悪くしても母親は「子どもの仕事の邪魔をし、迷惑がかかるから」とそのことを言わず、子どもも子どもで母の体調が悪いことを知りながらも「仕事がもう少しでひと段落するから、それから会いに行こう」などと後回しにし、結局死に目に会えず葬式で後悔の涙を流す。インド人は「死」が身近なものであるために今やっておかないと次できるかどうかなんて何の保証もないという刹那のもとで暮らしているのだ。よく日本人はインド人を嘘つきで、仕事もいい加減だなどといい、インド人が明日は明日の風が吹く」というような感じでふらふら生きているようなイメージを持っている人も居るが、私は全く逆だと思う。インド人こそ死を身近に意識しているからこそ生が有限であることを認識していて、そのため今自

分が何をすべきかを理解しているので自分の向かう方向を見失いにくく、生きていく実感など日本人のようにわざわざ手首を切らなくても感じる事ができているのだと思う。日本は圧倒的に死に直面する場面が少なすぎると思う。いつか訪れる死を見て見ぬふりして先送りしているように感じる。私はこの火葬場で、カーストごとに分けられた井の字の薪の上に亡骸が運ばれては焼かれ、3時間少々で女性は骨盤の所が残り黒い炭に、男性は胸板が残り黒い炭へと変化し、死体を焼くカーストの男の子がその炭の塊を棒で突き刺しガンガーに投げ入れる一連の流れるように美しい動作をみながら、自分のこれからの生き方について考えた。多分高いカーストの人は毎日美味しいものを食べ、財産も、地位も名誉もあつただろう。反対に低いカーストやもはやカーストにも入れなかった人たちは少しばかりの汁のようなカレーを食べ、棒のように細い体を酷使して働いていただろう。しかし、死ねばどんなカーストであろうが、どんな生活をしていようが3時間で全く同じ黒い炭の塊になる。生前持っていた地位も名誉も財産も全く関係なく黒い塊となって全てを受け入れるガンガーに吸収されていく様子眺めていた。

どれだけ時間が経ったかわからないが、ふと気がつくと今まで話していたインド人は未だに私の横に座り次々と亡骸が燃やされていくのを眺めている。今さらだが何をしているのか聞いてみると、彼の大事な娘が亡くなった為、地方から火葬に来ているらしかった。彼は涙こそ流していなかったがまっすぐにガンガーを見つめる視線がなんとも言えず悲しげであった。言葉も通じないのに何故かその気持ちだけは伝わってきた。彼は、死者が出た家の子どもは髪の毛の一部だけ残して全て剃るのだということも教えてくれた。もしかしたらそうすることで子どもうちから生は有限だということ教える為

かもしれない。何も喋っていなくてもなんとなく穏やかな空気に時が止まっているかのようだった。このまま永遠にこの時が続けばいいと思うほど心地よかった。彼も何も喋らない。私も何も喋らない。しかしそこには何ともいい難い温かい空間が広がって不謹慎ながら何故か幸せな気分だった。多分お母さんのお腹の中はこんな感じなのかも知れないと思うほどだった。彼は私に花の輪っかを渡し、娘の亡骸に手向けてやってほしいと言った。どうやら私と自分の一人娘とを重ねているらしく、私が花を手向けることで娘への気持ちを整理したいと思っっているようにもみえた。私のような見ず知らずの旅人に花の輪っかを手向けさせてくれる彼が私もどこか他人のように思えず花を手向ける約束をした。それからまた何時間もお互い話はないがゆったりと流れるガンガーを眺めていると、その周りで忙しく動き回る人、人々の生活の音がどこか上の空に感じられ、そんな天国のような風景に不思議と心が落ち着いた。彼はこの時何を考えていたのだろうか。気付けば夕方になっており、夕闇と夜の間の赤色と黒色を混ぜたような仄暗い色が映るガンガーの色がとも神秘的で、そのガンガーを見る彼の悲しそうな視線が今でも私の心を落ち着かせてくれる風景となっている。旅に出るとどうしても忘れられない風景がいくつかあるが、この時の彼と神秘的な色のガンガーはその一つとなっている。彼とは今でも文通をしている。私にとっては生きていれば祖父に近いくらいの歳だということが後に判明した。彼は、私を娘と、私は彼を自分の好きだったおじいちゃんと重ねていたのかもしれない。

あくる日も火葬場で亡骸が焼かれるのを眺めながらぼーっとしながら取りとめもなく考えごとが浮かびは消え、浮かびは消えしていた。そんな中私はこの火葬場である二人のおばあちゃんを思い出していた。精神科病院に勤め

ていると様々な患者さんが入院してくるため色々な人の人生に触れることとなる。この二人のおばあちゃんは共に80代で車いすに乗り精神疾患を患って入院となった。二人とも生活保護を受給していて、家族の面会などは全くない。一人はいかにも夫の後ろを3歩下がってついてきました。親戚づきあいもそつなくこなしてきました。専業主婦として家族の健康のみを想って生きてきました。という感じのおばあさん。もう一人はいかにも水商売上りの柄×柄の上下の衣類を組み合わせ、当時は先駆的だったであろうアイラインの入墨がすこし時代を感じさせるが、毎日真っ赤な紅をさして、車いすを駆使してイケメン男性看護師を見つければすかさずお尻を触り、したり顔をしている様子のおばあさん。期を同じく精神病院に入院し同じ病棟に入院している。二人がどんな人生を歩んできたか詳細を知るとは難しいが、人間どんな生き方をしても、最後は一人で孤独に死にゆき、真っ黒な炭の塊になるのであれば、私は後者のファンキーなおばあちゃんになりたいと思っただ。つつましやかな専業主婦が悪いということではなく、自分の人生を自分で決定し人に迷惑をかけない程度に思い切り楽しんで真っ黒な炭になりたいと思うようになった。この火葬場に来てから私の人生の目標は「いえーい、楽しかった」と言って死ぬことに決定した。何も傍若無人に生きるのでなく、自分がこのようにいろんな価値観に触れたり、考えることができる環境に生まれたという幸福を存分に利用し、誰でもなく自分が満足できる人生にしていきたいと強く思った。インド人のように一日、一日を「今日できる最善を尽くした良い日だった」と思って終えることの積み重ねが「いえーい、楽しかった」と言って死ぬことが出来る人生につながると思った。インド人は皆無意識にこのことをモットーに生きているような気がした。火葬場で死



に触れることでより生を考えるとというのはなんとも不思議な気もしたが、私はインドで、死に直面し、生が有限ということが理解できたからこそ、今どのように生きるのか、生きていたいのか、自分はいつか訪れる死にこうしていても少し近づいていくため、一秒たりとも無駄な時間を過ごしたくないと強く思うようになった。

インドから帰って私は精神科病院を辞めた。そして、今は一人でも多くの人が「生きてきて、楽しかった」と一瞬でも思うことができればと思い、地域の相談支援センターに勤めている。そこで40年、50年やそれ以上精神病院に入院している人の退院を手伝う仕事をしている。その人が望む場所で望む暮らしを実現し、生活の中の当たり前「楽しかった」を感じて死んでいけるような支援をする仕事だ。この転職に向けて私の背中を押してくれたのはインドだ。今日も大きな責任はあるが、趣味と実益を兼ねたやりがいのあるこの仕事に日々邁進している。

## パプアニューギニア

パプアというのは天然パーマという意味らしい。ニューは新しい、ギニア人。天然パーマで新しいギニア人という意味のパプアニューギニア。パプアニューギニアの童貞の男性は成人になるときに自分の天然パーマの髪の毛を使い、カツコイイかつらを作るらしい。そのかつらの出来でその後のモテ具合が変わってくるそうだ。高校生くらいの時に本で読んでそのエピソードが忘れられなかった。極楽鳥の干物みたいなものや、自分の集落でとれた色と

りどりの花やスキの種子や赤茶けた土を体に振りかけているその姿はなんとも魅惑的でいつかは行ってみたいと思う国の一つだった。私はいつも行く前に訪ねる国の事を勉強してから行くようにしていた。現地に行ってから「知らない」ということは命取りになることもあるからだ。歴史や国民性、危険な場所や行ってはいけないジエスチャーなど旅に行く前からその国についてウキウキ調べ物をする。このときから旅が始まっているような気がしてなんとも楽しい作業なのだ。いつものように地球の歩き方でも買ってまずはざっくり勉強しようかなと思いき書店に行くもなぜかパプアニューギニアの地球の歩き方は無かった。仕方がないのでとりあえずパプアに関連する書物を集めることにした。集めてみると第二次世界大戦の戦記を中心に、生々しい戦争の記録がほとんどだった。水木しげる先生のパプアでの生活を綴った本もあった。しかし今から旅立とうとする私が必要としている情報とは全く違うものだった。ジャングルで餓死しそうなときのネズミの撃ち殺し方から悲惨なダナルカナル島の戦況などおおよそ今回の旅行ではなかなか利用できそうもない知識だけが頭の中いっぱいになっていた。航空券は世界一周をしたマイルが残っていたので、そのマイルを利用するために複雑な航路となった。日本から台湾に行き、そこからフィリピンのマニラに行き、パプアニューギニアの首都ポートモレスビーに行きそこから国内線で私の目指すマウントハーゲンに行くこととなった。私の行きかかったマウントハーゲンは標高が高くパプアと言うと熱いようなイメージがあったがかなり涼しいとのことだったので、途中に降り立つ国全部のガイドブックから防寒着から日焼け止めから、移動時間に読む本や、現地の人が好きということで、インスタントコーヒーなど色々な物を用意していった。いざ出発。関空を出て台湾、そしてマニ

ラに順調に到着した。マニラでは7時間も乗り継ぎの時間があつた。次のフライトはまだチェックインを始めていないし、マニラ市内に散歩に行くことにした。大きな荷物を持ってマニラに出ると、じとつと汗をかくほどに熱い。本来ならばバスや電車で行きたいところだが、時間もあまりないし大きな荷物があるので、タクシーで世界遺産のサンオウガスチン教会に行くことにした。空港に欧米人を送ってきた少し田舎くさいタクシーの運転手に教会まで行って欲しいと伝えた。何度言っても首をかしげるばかりで中々伝わらない。英語で言っても伝わらないので、大きく紙に単語を書くと「オーケー」とどうやら老眼で小さなものが見えないらしい。それにしてもあんな大きな字にしないと見えないなんて運転と言う職業が果たして大丈夫なのか一抹の不安を覚えたがいい人そうだったのでこの運転手さんをお願いすることにした。私は人を見る目には少々自信がある。旅ではこの人についていっていい人かどうかを見極める術が大切になってくる。旅で一番のだいご味は人との出会いなので危険を恐れて全くついていけないと全く旅が楽しくないと思う。ただ誰にでもついていけばいいというものではない。この人がついていっても良いかどうかをゆっくりと話し、判断する力は日頃の仕事柄いろんな人と接することで観察力を磨いているつもりだ。このタクシー運転手はなんともいい人な感じがして仕方がなかった。その教会までの道はひどく混んでいた。全く進まない。まだ目的地まで到着もしていないのに2時間あまり経過している。運転手も想像以上の渋滞なのか自分の飲み水とガソリンが空っぽになりそうだと気をもんでいる。飲み水は飛行機から持ってきたものがあつたので、一本を運転手に渡した。最初は断ってきたが、やはりのどが渴いたのか少し微笑んで申し訳なさそうに私の渡した水がぶがぶと飲んだ。ようやく

目的地に着いたころには3時間以上が経ち、ガソリンが空っぽになっていた。私は世界遺産で下車し、タクシーの運転手と一時間後にまた、この場所で会おうと約束した。運転手はガソリンを入れてくると言ったので私はパスポートとお金などの最も重要なものだけ持ち、大きな荷物を車内に置いて。世界遺産の教会を満喫し、私は待ち合わせの場所に戻ってきた。タクシーが居ない。30分待つても来ない。タクシーの運転手の電話番号も聞いていない。これはやばいのではないかという思考が頭の中を駆け巡った。しかし、絶対にあの運転手は荷物を持ち逃げすることなど無いと信じ切っていた。しかしこのまま待っていたら飛行機の出発時間に間に合わない。約束の時間から一時間も経過した。もういくらなんでも空港に向かわないと完璧に飛行機は出発してしまう。そんな様子を察知したのか近くに居たガイドを生業としている人たちが集まってきた。私が事情を説明すると「なんてこった」「なぜ電話番号を聞いておかない」「運転手は逃げたに決まっている」とみんなで寄ってたかって大騒ぎし、過干渉にお節介にも私を警察にまで連れて行ってくれた。しかし、警察には相手にもされず、私は半狂乱になって「警察はどうでもいいから空港までのタクシーに乗りたい。また帰路にここに戻ってくるから、もしタクシーが帰ってきたら連絡先を聞いておいて」と告げタクシーをひるい飛び乗った。空港に着くと飛行機出発の15分前。手荷物検査には長蛇の列ができている、目を血走らせ泣きながら待っているとみんなが先に行かせてくれた。もうどうお礼を言ったらよいのか解らないので、大きな声で「ユ―アーゴット」と叫びチェックインカウンターに向かう。悠長な空港職員が「なぜ荷物がそんなに少ないの?」と聞いてくる。私は「アイライクライト。ノープロブレム」と連呼し駆け足でチェックインを済まし、ダッシュで入国

審査やら空港使用税へ進む。「空港使用税！」ここにきてさすがにもうだめかと思った。空港使用税を忘れていた。そんなにペソが無い。もうだめだ。窓口の係員に一度外に出てお金を両替して来いと突き返され、ゲートを通してもらえない。さすがに今から外に出ては全く間に合わない。ここまで来て夢にまで見たパプアニューギニアに行けないなんて死んでも嫌だ。そうなると人間何をするかわからない。そこらへんにいるフィリピン人をつかまえて泣きながら「ユーベネフィット（あなたは利益？）」「日本円をちらつかせながら誰かれ構わず両替を頼んだ。見かねたフィリピン空港職員が自分の財布からペソを出してくれた。」「ピリープミー、ユーベネフィット」英語は意味不明だが多分私の気迫に負けたのか両替してくれた。そうやって死にもの狂いでなんとか飛行機に乗った。それにしてもフィリピンは色々なことに巻き込まれる国だと思った。こうして未知の国パプアニューギニアに、もはやコンピニに行くよりも軽装で突入することになったのだ。私の持ち物といえば、お金とパスポートと、パプアの人は調味料をあげると喜ぶからと機内食から頂戴した塩胡椒のみだった。いくら旅は荷物が少ない方がいいと言ってもやり過ぎだ。しかし荷物がないとこんなにも空港がスムーズだということは初めて知った。

パプアに到着した。ここでも荷物のない洗礼が私を襲う。本来なら荷物にそつて空港を出るのだが荷物のない私はふらふらと人の流れについてあるいていた。すると明らかに観光客が出ていく場所ではないであろうフェンスで仕切られた場所に到着した。フェンスの外からは歯と目だけが恐ろしく白い筋骨隆々の男達がこちらを眺めている。暇だから飛行機や観光客を見に来ているらしい。あんなのに一発カウンターパンチを食らったら即死だ。フェン

スの外に出ることを躊躇し、フェンス越しにその筋骨隆々の男たちとお見合  
いをしていた。そんな時遠くの出口で白人がなにやら騒いでいるのが見えた。  
「そつちだった」荷物が無いことで身軽な現地人と一緒に出口まで来てしま  
っていた。私の居る所は現地人専用の出口だった。急いで門番に謝りもう一  
度空港に入れてもらい、脱出した。とりあえず空港脱出は成功し、パプアの  
地は何とか踏むことが出来たが迎えはない。観光客を乗せたバンはとづくに  
行ってしまったようだ。パプアにはタクシーがない。ホテルの送迎車しか観  
光客が乗ることのできる車は無いのだ。私も日本に居るときに誰かのブログ  
で見つけたツアー会社にメールを送っては居たものの、メールの返事は着た  
り来なかつたりで全く話は詰められていないまま今日を迎えていたのだ。な  
んとなく到着日と飛行機の便名はメールしていたが返事は来ていなかった。  
さすが、一筋縄にはいかない国パプアなどと考えていると、目の前を何かの  
動物の下あごの骨を持った爺さんが一台のバンに向かって下あごの骨を売り  
つけ始めた。するとバンのドアがスーッと空き、助手席の欧米人がその骨を  
品定めし始めた。すると運転席に居たでかいパプアの男が「マイコ！」と話  
しかけてきたではないか。これがやり取りしていたようになかったよう  
なメールの相手ピムさんだ！良かった。探していたのにどこに居たんだ？と  
質問されるもあまりの勢いに「ソーリー」としか答えられない。「荷物はそれ  
だけか？」との問いにも「ノープロブレム」と答えた。車に同席していた欧  
米人が「クレイジージャパニーズガール」と言って驚いていることだけは感  
じ取れた。到着していきなり動物の下あごの骨を買う方がクレイジーでは？  
等と思っていると全く窓のない牢獄のようなプレハブにつれて行ってもらっ  
た。「チーププリーズ」と言ったらこのホテルになった。このプレハブは塀で

囲まれていて塀の上には有刺鉄線。門番が毎回門を開閉してくれ、一人では外に出てはいけなと言われた。どうオベンチャラを言ってもホテルとは言い難いプレハブに宿泊代を支払うと恐ろしいことに気付いた。色々なことがあり過ぎてポートモレスビーで両替をしてくるのを忘れた。あるのはドルが少しと、大金持ちに見えるだけの千円札。挙句にリュックもない。その他にあるのは自分の体と、カメラ（充電器は無い）、紙数枚、ボールペン、パスポート、空港でいただいた3センチ×3センチの塩胡椒。未だかつてさすがにこんな軽装で旅をしたことはなかった。あるものは唯一「自分」だけだった。そういえばお腹がすいた。しかしプレハブのディナーは高額過ぎて手が届かない。一人で塀の外へ出てはいけなと言われたが、周りを見渡すといて行ってくれる人もいない。よしっ、私は幸い身長173センチ。今までデカ女でとても嫌だったがこの時の為に大きな図体に産んでくれたお母さんありがとうと感謝の気持ちを胸に、パークアのフードを目深にかぶり、男の歩き方を練習した。よし、20メートルごとに後ろを振り返ろう。肩をいからせ、ハンドタオルを二の腕に巻きつけ即席上腕二等筋の出来上がりだ。狭い部屋を男になりきって闊歩しているとまた笑いがこみあげてきた。私は一体何をしているのか。いや生きるために食料を必要とし、食料を得るために命がけで狩りに出かけるためにいま体を馴らしているのだ。これは今まで何億年も前から生物が行ってきた生の営みではないか！さすがに地球上最後の秘境パプアニューギニア！そんなことを考えながら一人ローカルなマーケットへの士気を高めた。

プレハブの外に出た。一発ではれた。「変な外人の女が居る」という目でみんながこっちを見ている。豚を抱いているおばあさん。パプアでは豚がとて

も貴重で子どもと同じように育てるほどだそうだ。母親が左右のおっぱいを子どもと子ブタにそれぞれ吸わせることもあるそうだ。豚が吸ったおっぱいはたれ方が全く違うので、すぐにわかる。やはり子ブタの吸引力は人間の赤ちゃんのそれとはパワーが違うようだ。全く土に帰りそうにもない赤いビールがあたりにもき散らされ土の上に揺れる様子は彼岸花のように見える。アジアとは違うにおいがする。何もかも新鮮だった。パプアの人みんなわきがの臭いがする。これが民族学者がこぞつてこの国を訪ね研究している地球上最後の楽園の人たちの香りなのだ。なんとも魅惑的に思えてきた。マーケットに着くとやはり治安の悪さを物語るかのように全ての窓が金網で覆われている。車のガラス、建物のガラス、芋屋はまるでパチンコの景品交換所のような。早速食べ物屋を探して見るが、どうやらレストランは無いらしい。ガイドブックは無くしたので、おぼろげな記憶をたどると1軒か2軒の食堂はあるとガイドブックに書いてあったが、高額で飲食代が支払えなかった場合、代わりに私が売り飛ばされても困るので、ここは大人しく芋にしよう。この国の主食は芋だった。というか芋しかないと言っても過言でない。この日から毎日、毎食芋地獄が続くことになる。じゃがいも・タロイモ・少し甘いイモを、焼く・揚げる組み合わせのメニューしかない。数学の苦手な私でもおおよそ何パターンかは計算できる。初日は少し甘いイモを揚げたものにしてみた。しかも調味料がやはり貴重なのかペットボトルの蓋に強引に穴を開けた容器に入った塩が芋屋のフェンスに大事そうにひもでくくられている。私が芋を指さしただけで店員の屈託のない笑顔があふれる。明らかにへんちくりんな女ということばれている。言葉も解らないのでその場でイモにかじりつき自分の中の最高に美味しい顔を試してみる。店員が大喜びでキャッキ



ヤツと笑っている。外国人の女が一人で街を歩いているのは相当珍しいらしい。

食料は何とか手に入れたので次は、マーケットに入り限られたお金の中どうしても必要なものを考える。水と帽子と新聞とパンツ一枚を買った。高地なので昼間の日差しは日本の物とは比べ物にならないくらい強烈だった。夜は相当冷えるとガイドブックに書いてあった記憶があつたが上着は高価だったので、Ｔシャツを一枚買った。新聞はパプアの現地の雰囲気をつかむために購入。パンツは日本を出てすでに3日程履いている。アジアを旅していると下着など毎日替えなくても気にならなくなっていた。パンツは日々足を入れる穴と腰が通過する穴をくるくる回し裏表を変えると結構な日数いける。

しかし少し日本を出て暑い国で汗やら冷や汗やらをかき、さらにここから10日も同じパンツというのはさすがに淋しいので、日本人らしく火の玉模様のパンツを買ってみた。プレハブに帰る途中腰の曲がつたおばあちゃんが近寄ってきて、すつと私の手を触り、直毛の髪の毛をなでた。最初はびつくりしたが、どうやら飛行機に乗ってきた色の白いものは神様であるという信仰らしい。新しいものを次から次へと運んでくる飛行機と肌の白い人間は確かにパプアの人の想像をはるかに超えたものを運んでくる。酒もそうだ。今まで酒を飲む習慣のなかったパプアの人は外国から入ってきたことで酒を初めて知った。体質的に酒に弱く、娯楽のほとんど無かったパプアの人は酒の心地よさに驚き、はまっていくとともに、酒欲しさに金が必要になった。少し前まで貝貨が流通していたパプアで貝貨よりキナ、キナよりドルだということになる。そして今まで金が必要でなかったのに金が必要になる。服もそうだった。服を着る文化もなかったのに現代社会が席卷し始めてからみんな服

を着るようになり、服を買うために金が必要になった。今までは物々交換で生活していたものがどうしても貨幣経済に巻き込まれていく。仕方ないことなのかもしれないが、飛行機に乗ってやってくる白い肌の人は本当に神なのだろうかなどと考えてしまう。そんなことをしているうちに明日の年に一回のマウントハーゲンショーに向けて眠りについた。

マウントハーゲンショーが始まった。年に一回の祭りということですが、熱気だった。まだ寒い早朝から各集落ごとに思い思いのかつらをかぶり化粧をして、自然の中でとれるもので目いっぱい飾り立て独特の歌とともに大地を踏みならしている姿は圧巻だった。特に女性の踊りは力強く何時間見ても飽きなかった。私は私で服も日本を出発したまま、何よりカメラの充電器が無いのでむやみにシャッターを押すことができない。最近日本ではスマホが繁茂し、どんな時もスマホで写真を撮りまくる若い人の姿をよく見かける。どこに行っても自分の目で見るより先にケータイをかざし写真を撮っているような気さえしてくる。私はというと、残りの日程を考え、どうしても感動した場面だけを写真に収めないとカメラの充電がなくなってしまう。なのでもちろんまずは一生懸命に自分の目で見て感じ、どうしてもこの光景は覚えておきたいと感じた瞬間でシャッターを押さないといけなかった。しかし、そのようにお祭りを見ているとただ、だらだらとみている時よりたくさんのが見え、楽しめたような気がした。私の大好きな写真家がなぜ写真を撮るのですか？と聞かれ「そこに未練があるから」と答えていたことを思い出した。写真を撮るということは、自分の目で見て五感をフルに活用してもまだまだ感じていたいような場面、まだまだ飽き足りない好奇心がどうしてもおさまらない時のための最後の手段だと思った。充電器が無くなり物質

的に貧相になったことで、逆に感じるということにおいては豊かになったように感じた。自分は日本できちんとその場所を感じて生きているのかどうか、豊かとはどういうことなのか、裸に近い男女が踊り狂う祭りを見ながら考えながらプレハブに戻った。本日も夕食は芋だった。数日目になると芋を買いに有刺鉄線の門外に出るのも慣れたものだ。もう何日も食堂の食器洗い用洗剤を拝借して顔を洗っていたことと高地の乾燥した気候で口の両端が切れ血が出てきていた。そういう時は揚げた芋だ。芋の油分をまず顔全体に塗ってから芋を頂いていた。一石二鳥とはこのことだ。都合のいいことに塩は付いていない。しかし毎日芋ばかり食べているとさすがの私でも嫌気がさしてくる。少ない持ち物の中から3センチ四方の塩胡椒を取り出し、全く食欲のわからない自分のためにどのようにこの塩胡椒を活用することが一番有効かと考える。とりあえず空腹に任せて芋を食べ最後の方の芋に嫌気がさしたときに一気に塩胡椒で味を変化させ胃袋に詰め込むか、はたまた最初から全体に振りかけ普遍化された極薄味の芋を楽しむのか、はたまた最初の一口にたっぷりと存分に塩胡椒を振りかけ一点豪華主義か。こんなことを考えるしか夜の過ごし方は見つからない。結局、毎日毎日繰り返される芋に食もあまり進まずやることもないのでベットに寝ころんだ。そして、豊かさについて考えていた。夜の外出はもつてのほか、テレビもラジオも、ガイドブックも、今日撮った写真を見返すほどの充電も、温かいシャワーの出るお風呂も、食べ物も十分でない。着るものも十分に無くあまりに寒いので予備にと買ったパンツとTシャツを重ね着し、新聞を体に巻きつけるが、一向に温まらない。電気も十分ではなくすぐ停電し真っ暗になる。基本的な事だが夜は眠るためにあるのだ。そうこうしているうちに世は更けていき、私もうつらうつらして

いた。急に部屋の中でガサガサッと丁度モルモット位の大きさの物が、床に放り投げていたビニール袋に突進したような音と云うか気配で目が覚めた。辺りには誰もいない。フロントの現地人も朝まで居ない。電気もまた停電なのかつかない。真っ暗過ぎて、自分が目を空けているのか閉じているのか自分の指を目に突っ込まないと確認できないほどだ。突っ込んでみると痛いので確かに目はあいているが、周りが真っ暗なので何も見えないという事が判明した。日本なら電気がつくだろうし、つかないにしても家の外に何かしらの明かりがある。ここにはそれがない。今まで世界一周もしたし、いろんな国に行ってきた。電気のない場所にも行ったし、山奥にも行ったこともあった。しかしこれほどまでの漆黒の闇は初めてだった。そしてこんなに闇が恐怖だということも初めて知った。日頃自分はあまり何にも依存せずに孤独が好きなどと甘っちょろいことを思っていた。本当の孤独や闇、それがどれだけ恐怖なことか理解できていなかった。ガサガサと音をたてたものの正体が分からないが、分かったところでどうすることもできない。もともとひよろひよろな上、芋しか食べておらず、そのイモで摂取したカロリーも自分が存在するために内臓を動かしたり体温を上げることに使ってしまったている私かもしれない。もしパプア固有の恐ろしい肉食獣かなにかと戦えば一発で天に召してしまうだろう。そうは思いながらも武士道の日本人、敵に背中を向ければおしまいだと思い、ベットの足を移動し、壁に背中ぴたりつけ、ガサガサの正体と対決できるように構えた。そんな中私は、旅に出る前に読んだ第二次世界大戦中の日本兵の事を思い出していた。パプアに関する資料が少ないので出発前に沢山読んだ関係書物がほとんど戦記だったので、戦時中の日本兵の情報だけは豊富だった。見たこともない仮面をつけ、食人部族もいたと言われて

いるパプアの人々や、蛇やトラなどの猛獣がどこにいるかもわからない未開のジャングルの中で、食料も尽き飢えと渇きが容赦なく襲い、マラリアで仲間がやられ死んでいき、また日本国からの支援も途絶え、敵に周りを囲まれた戦況で日中は日光に焼かれ夜は見たことがないような闇が支配し寒さが自分の体温を奪っていく、こんな環境で日本兵はどんなことを思ったのだろうか。それに比べ今の私は少なくとも壁と天井はあり、芋も少しばかり食べることが出来、水もある。こんな状況でもこの闇に包まれたときこれだけの孤独と恐怖を感じるのだから戦争中の日本兵の精神の強靱さは到底想像さえつかない。そんな人々が居てくれたからこそ今の自分は存在させてもらっているのだなどと想いながら一人日本兵に黙とうをささげた。しかし、そんなことを考えていてもガサガサの正体は全くつかめない。そんな時また大好きな水木しげる先生が言われていたことを考え始めた。先生は「妖怪が日本に棲みにくくなったのはピカピカ明るくなり闇が減ったからだ」と言われていた。私はそれを聞いた時水木先生ともあろう人が意外と普通な理由を言われるのだと正直思っていた。しかしそれは違った。水木先生は第二次世界大戦時パプアのラバウルに赴任しておられ、この闇を知っていたからそのような事を想われたのだと思った。電気もなく本当の夜の闇に包まれ無力な自分を痛感したとき、人間は何かを妖怪のせいにしなないと精神的にやっていけないかったのだと思う。もちろん本物の妖怪もいるかもしれないが、電気のない昔深い闇に包まれた夜が来る度に人々はイメージをふくらまし、闇からたくさんの事を想像し、ある時は確認できない恐怖を妖怪の仕業にしたりして生きてきたのではないか。水木先生が言われていた「明るくなった」が電気かどうかはわからないが、電気は私達の生きている日本から夜をなくしてしまったの

だと思った。24時間流れ続けるテレビ、いつでも誰かとつながる事のできるインターネット、窓を開ければ轟音をまき散らし走りゆく車のヘッドライト。日本には夜の闇が無くなってしまったのだと思った。私もそんな日本の中で知らず知らずのうちにいろんなものに依存して生きていたことに気付いた。マンションの上の階からする子どもの足音、どこかできている救急車のサイレン、一見直接的に人に依存はしていないが、どこかに人がいる安心感に依存し孤独な夜に接することもなく環境に依存して生きているんだ。電気が溢れ本当に孤独な夜が無くなったことで物質的には豊かになったが、物を自分の目で見る力や、想像する力、自分は非力で一人では生きていけず、周りに依存し生きているのだという気持ち、このようなものが見えにくくなっていくのではないかと感じた。私は全く文明的なものを持たず体一つでパプアニューギニアに来たことで豊かさや自分の傲慢さに気付かせてもらったのだ。アイパッドを使いこなし、きれいにお化粧をし、毎日新しいパンツと靴下を履いていては絶対気付かなかったと思う。また、この旅以降、旅の大切な持ち物を考える際に「自分」という一番大切な物も数に入れるようになった。今までここに意識が及んでいなかった。これも荷物が全く無くなり、唯一の持ち物が「自分」だけになったからこそ知ることができた大事な経験だった。不思議とどんな出会いや出来事にも必ず意味があり、そのおかげで旅は楽しいのだと改めて再確認した。今までの旅とはまた違った大切なものを教えてもらったような気がした。

無くなった荷物は帰路のフィリピンで愉快的仲間たちとの珍道中に再び巻き込まれた拳句、寸分の所で戻ってこなかったが、数カ月再びフィリピンを訪ねると親切なフィリピン人夫妻の4階建ての家の寝室のベッドの下で保管

されている自分のリュックと再会できることとなった。日本では見たことない戦闘型の形のたくさんのゴキブリとともに。こんな出会いがあるからこそ旅は全くやめられない。日本に帰って仕事で患者さんとマクドナルドに外出した時に、ポテトを無意識に唇に塗りながら食べていると、患者さんに「変な食べ方ですね」といわれ、「つい癖で」という自分が少し嬉しかった。

旅に出てから大きく自分が変わった。まずは嫌いだった自分が自分自身で考え、行動することで好きになった。自分で行動し自分で責任を取るという当たり前の逃げられない過程を繰り返すことで自信が生まれ、自分は自分の意思で生きているという事を実感することができた。様々な価値観に触れ自分を省みるために私にはわざとたくさんの欠点が与えられているのではないかとさえ考えるようになった。また、今までは自分のいまいちな部分をどこか親や周りのせいにしていた部分があつたが、今は違う。今までの父親の自分に対するかわりに対しても受け取り方が変わった。私は仕事柄いろいろな人と接することがあるが未だに父親以上に腹の立つ人に出会ったことが無い。その為あまり怒ることが無く、よく穏やかだと言われる。最近では、もしかしたら私のこの温厚な性格は父親が怒りの閾値を無限に広げるためにわざと、あのような関わりをしてこのような性格を作り上げてくれたのではないかとまで思う。旅に出るまでは大嫌いだつたが、今ではこのことに気付くことが出来る私に育ててくれた父親に感謝している。よく一人旅で自分探しを…などというが一人旅に出て、有名な場所を巡ったところで自分を見つけ

ることなどできないと思う。一人で旅に出たれにも頼れない言い訳できない環境で自分の力だけで生き、多様な価値観に触れ、真摯に自分と向き合い、自分を知って初めて自分を見つけることができるのだと思う。自分が当たり前にと与えられていた環境や資源がどれほど恵まれているかを理解したことで、自分のやりたいことや好きなことが明確になり、それによって自分の人生が充実し、自分を生きていると思うことが出来ると、全てを認め、許し、受け入れることができるようになった。結局は自分に向き合う時間を作るための一人旅なのだ。

そして自分を受け入れ他者を認めることが出来たことで、この世界全体を愛おしく思うことが出来るようになった。そう思うことで、これから自分が、どのような人に出会い、どのような時間を過ごすことができ、どのように死ぬのか、一日一日が楽しみで仕方がない。自分に与えられた条件の中でどれだけ人生を楽しめるかと考えただけでワクワクする。周囲の文句ばかり言っている人を見かけると、自分の人生が充実していないんだな、どうやってらこの人の人生が充実するのかな、などといとお節介なことを考えてしまう。相談員の癖だと思う。

また旅に出て、色々な国で「死」に直面することで「生」は有限なのだということを強く意識するようになった。そうなるとお金より何より自分の時間が尊くてたまらなくなる。私の大切な人生の時間を「明日も仕事なんて嫌だな」なんて思いながら無駄に時間を浪費する事などはまっぴらごめんなので、仕事にも当然常に全力投球になる。人生のうちで何万時間も費やす仕事を毎日嫌々やるなんて考えただけでも地獄である。私は忙しく常に焦燥感に追いかけられているのだ。こうしている間にも私の死期は刻一刻と近づいて



いて、何より一番大切な私の時間をすり減らしながら生きているのだ。旅に出てから無駄な事をする時間が減った。常識の範囲内では参加するが、上司の文句を言うようになくならない飲み会や、どこからが浮気だと思う〜というような全く興味のない内容のご飯会に、一秒一秒死に向かっている私の大事な時間を費やすことは無くなった。少し頑張れば鉄の塊に乗って無限に素敵な人達の居る世界に飛び出すことのできるこんなに楽しく幸せな世界に存在できたというラッキーな今回の輪廻の時間を考えると、上司とか浮気がどうかそんな小さなことには全く関心が無くなってくる。私の時間は他の楽しいことを考えるためにあるのだ。そんな忙しい私が時間を割いてでも大事にしたいと思うようになったのは、「大事な人と過ごす時間」だ。「いえーい、楽しかった」と言つて死ぬことが目標の私にとっては、人生の中でどれだけ大好きな人達との想い出を作ることが出来るかということが最優先事項となった。どんなに遠くに旅に出ても結局は自分自身や「行つてらっしゃい」と送り出してくれた日本人の事を考えていることに気付いた。よく「一番好きな国は？」と聞かれるが私は迷わず「日本」と答える。それは大好きな人の側が自分の居場所だからだと思う。旅の道中にあつたこと、考えたことを伝えたい、あの人だったらどんな顔で私の旅の話聞いてくれるかな、と結局旅に出ても常に頭は日本の大好きな人のことを考えている。どんな国に行つても結局は人に関心がある私は、「日本」が好きというよりかは、日本に居る大好きな人が好きなのだと思う。結局私の帰る場所はここなんだなと思う。人を信じる事が出来なかった私がこんなことを思うことが出来るようになったのは旅を通じて素敵な人にたくさん出会うことが出来たからだ。

またこれから出会えるであろう素敵な人も大事にしたいと思うようになった

た。まずこんな広い地球上で出会えることだけでも奇跡なのだから、どんな誘いにも自分の嗅覚を信じてまずは動いてみるようになった。どんなに頑張っても出会えない大好きになるであろう人が地球上にごまんと居るのに、自分が勇気を出さないことで出会えないなんてこんなにもつたいないことはなれど思っている。なので興味があることや、自分の嗅覚が反応したものには出来るだけついていってみようと思うようになった。陰気な私にとっては大革命である。そして人との付き合い方にも変化があった。インド人のようにはいかないの、母が風邪を引いたくらいで仕事そっちのけでお見舞いに行くようなことはしないが、「ありがとう」「や」「大好き」「素敵だね」「ごめんなさい」はその場できちんと言うようにしている。言うようにしているといふよりは、次に言葉を交わすことができる保証など全くないので、いつもお別れが来ても後悔しないように今できる全力で友人、家族、もちろん精神に障害を持った人にも関わるようになった。

そしてそんな中から見つけ出した宝物のような大好きな仲間とは時間が許す限り語り、幸せな時間を共有したいと思っている。いい意味で炭の塊になる人生には地位も名誉も高級な服も靴いらず、どれだけ素敵な仲間と出会いたい時間をごせるかどうかだけが重要だからだ。

これが旅に出て私が教えてもらったことである。旅は必ず終わりがくる。終わりがあるからこそ毎日を全力で感じ、楽しみ、やりつくすのだ。人生も全く同じだと思う。カンボジアの安宿でだらだらと漫画を読んで過ごしている旅人が何故かあまり好きになれないのは、彼らは終わりを意識していないように見えるからだ。私は終わりを意識しているからこそ今何をすべきなのか、どうしていききたいのかと自身に問い続け一瞬一瞬を本気で生きていたい

と知っているし、又そういう人が好きだ。もし20代で旅に出ていなかったら今どんなことを考えながら生きていたのだろうかと思像すると恐ろしくなる。自分の欠点ばかりに目をやり、うまくいかないことを周りのせいにし、人の悪口などを言いながら人生の大切な時間を浪費していたかもしれない。旅の出会いはいつも私の生き方の指標を示してくれる。私は今、一つの夢を描いている。私が訪ねたある国では障害者は穀つぶしで家族の厄介者とされておられ、生まれてすぐ施設に入れられてしまうそう。その施設で家族とも隔離されて一生を終えると聞いた。私は今培っている障害者への支援方法がこの国へ輸出することで、障害者であっても当たり前前に暮らし、人とのかわりを楽しみ、働き、給料を家に持ち帰った時、今まで穀つぶしとされてきた障害者への価値観は変容するのではないかと考えている。これが私の夢となった。どんな障害があろうとなかろうと、あたりまえに人生を楽しむことが出来、誰もが些細で幸せな日常を送り死んでいくことが出来る環境を構築したいという夢だ。環境さえ整えることが出来れば、障害があっても十分に力を発揮することが出来るという日本の障害者支援技術を輸出することで、障害者本人の、家族の、その国全体の障害者観を変化させられれば楽しいのではないかと思っている。そして一人でも多くの人が「生まれてきて良かった、楽しかった」と思い、死んでいくことができる社会にしていくような仕事を将来できたらと思う。考えるだけでニヤニヤしてしまう。これも旅に出て自ら感じることで見つけることの出来た夢だ。このように旅は自分の価値観を変容させてくれ、どう生きるかを考えさせてくれ、本当に大切なものは何なのかをいつも温かく教えてくれる。そんな世界中の人が私は大好きだ。そのおかげで一日が24時間では足りない程楽しく毎日を過ごすことが出来

ている。こんな私の夢を共にワクワクしながら聞いてくれる大好きな人が日本にはいる。そんな仲間と語り合う時間がたまらなく愛おしいと教えてくれたのが私の20代の旅だった。しかしたまに疲れたり、少し将来を見失ったりして、ごみステーションの芳しい香りでも回復せず、生きているパワーを感じたくなった時には私はまた颯爽と航空券を取り、想像だにしない新しい出会いを求め飛び立つのだ。この癖は死んでも治りそうにない。